東京パラ大会と「語る五輪」

先ほど朝のニュースで、昨夜の東京パラリンピックの開会式を報じていた。無観客ではあるが、会場前には大勢の人が詰めかけていた。開会式よりも、コロナ禍で密集した人だかりに注目した。昨日 24 日の朝日社説から。

コロナの感染爆発で東京の医療提供体制は深刻な機能不全に陥り、専門家が「自分の身は自分で守って」と呼びかける状況にある。そこに世界各地から選手を招き、万単位の人を動員して巨大な祭典を開くことに、疑問と不安を禁じ得ない。一方で、五輪を強行しながらパラを見送れば、大会が掲げる共生社会の理念を否定するようで正義にもとる。そんな思いも交錯して、五輪が終わった後、議論を十分深める機会のないまま今日に至ったというのが、率直なところではないか。

気がかりなのは、一般客を入れない決定をする一方で、学校単位で小中高生に観戦させようと、政府や都が前のめりになっていることだ。選手の躍動に直接触れる意義は否定しない。だが子どもの感染も増えている。専門家の意見を聞き、自治体・学校が責任をもって慎重に検討するのはもちろん、本人や保護者の意向を十分尊重し、くれぐれも強制にわたることのないよう留意する必要がある。

この社説を読んで、どうも歯切れの悪さを感じた。五輪開催時より感染が爆発的に拡大し、医療崩壊に陥る中で、パラ大会を開催していいのか。五輪で社説が主張したように、朝日新聞として開催中止を求めるべきではないのか。全国高校野球を主催している朝日新聞として、遠慮がちになっているのだろうか。パラ大会の意義自体は否定しないが、コロナ危機という災害が襲っているのに、たとえ無観客であっても開催を強行するのは、あまりにも危険でないか。とりわけ生徒の「観戦動員」は、絶対にやめるべきだ。

朝日夕刊に「語る東京五輪」が連載されている。示唆に富む指摘も多いが、23 日の医師・作家 夏川草介さんの指摘に注目した。

開会式を含め、五輪のテレビ中継を 1 分も見ていません。勤務する病院の医局で放映されてはいましたが、コロナ診療にあたる医師に見る暇はなく、話題になった記憶もありません。この期間の一番の驚きは、政府や東京都のトップが、この緊急事態宣言下での五輪開催と、新型コロナウイルスの感染拡大との関連を否定したことです。

緊急事態宣言そのものは、これまでは一応の効果があったと思うのです。今回は、宣言慣れ、デルタ株の影響を考慮しても、人があまり減らなかった。要因の一つは「宣言が出ているのにスポーツの大会ができるんだったら、外に出てもいいんじゃないか」という心理的な影響です。緊張感をぎりぎり保った最後のバランスが崩れてしまったという認識を持っています。実際、県外に旅行して戻ってから陽性が判明している患者がかなり多い。「五輪が開かれているんで、旅行くらい、いいかなと」と話す患者もいます。

（2021 年 8 月 25 日）